

堀河院艶書合が象徴するもの

服 部 嘉 香

じ、院政は布かれなかつたから、艶書合は、仙洞においてでなく、禁中での催しであつたのである。

歌書簡は口承時代には口頭歌として、後には相聞歌として、古く行われたばかりでなく、文書簡の時代となつても、和歌の流れの絶えぬ限り、絶滅することはない。特に、堀河院の艶書合は、歌書簡として珍しいばかりでなく、歌合の風流としても、前後に例を見ないものであつた。康和四年〇三閏五月、本稿の時代区分では、鎌倉時代の前期、院政時代に入つての催しであるが、政治史、文学史では平安朝時代の末期に当たり、事が有閑生活に恵まれた平安期の遊惰、安逸を極めた末期的症状を象徴すると共に、書簡として幾多の派生的意義を持っているのである。

この歌合は、堀河天皇の勅によつて催された。「今鏡」^{「たまづき」}の章に「堀河院の艶書合とて、末の世までもとどまりて、よき歌はおほく撰集などに入れるなるべし。」と伝えている。この堀河院とは、太政大臣藤原基経の邸名で、円融天皇、堀河天皇が皇居とした所である。院政は、後三條天皇の遺志を汲んだ白河上皇の寛治元年一〇七〇に始まり、堀河天皇はその前年即位。在位二十二年の後、堀河院で崩

じ、院政は布かれなかつたから、艶書合は、仙洞においてでなく、禁中での催しであつたのである。

同書に、「内にて殿上の人々歌よむときこゆるに、宮づかへ人のもとにけさうのうたよみてやれと仰せごと」とあつて、歌は男女合わせて四十首、男側の「あらまじごと」八首を添えて、「群書類從」巻第二百二十六に収録されている。殿上人側は、大納言公実、源中納言国信、宰相中将忠教、刑部卿俊実、左京大夫俊頼、権中納言俊忠、権少将師時、藤原為方、藏人家時、藏人正兼の十人、宮仕へ側は、周防内侍、康資王母筑前、院大進、女御殿ゆう花、前斎院紀伊、殿肥後、四條官中斐、中官上總、一宮紀伊、女院安藝君、小大進の十一人。五月二日、まず殿上人から女房へ懸想文としての歌を送り、女房から同じ人への返歌。五月七日には、「ありつる女房のもとに恋歌よみてまゐらすべきよし仰せられ」とあつて、こんどは、女房から殿上人へ、殿上人はまたそれに返歌を遣わすという趣向である。普通の歌合とは違つた形式で、趣向も面白く、後世へ評判を残したのも当然であるが、いづれも歌人で、老齡者が多く、その道の優者ぞろいであつたから、作品も、応酬よりもなかなか見事

堀河院艶書合が象徴するもの

で、遊惰、安逸とはいえ、気持のよい風雅となっている。

二

少し例を挙げてみると、

思ひあまりいかでもらさむおく山のいはかきこむる谷の下水

(大納言公実)

返し

いかなれば音にのみきく山河のあさきにしもは心よすらむ

(周防内侍)

おなじ大納言くれなゐのうすやうにたてぶみに

年ふともいはでくちぬる埋木のしたの心はふりぬ恋かな

(大納言公実)

返し

ふかからじ水無瀬の河のうもれ木は下の恋路に年ふりぬとも

(康資主母筑前)

人しれぬ思ひありそのはま風に波のよこそいはまほしけれ

(俊忠中将)

返し

音にきくたかしの涙のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ

(一宮紀伊)

郭公まつにつけてもきさがにの何れの世にかしるきとぞ思ふ

(筑前)

かへし

しるしありてこぬよもあれや郭公なかなかけしくもの振舞

(大納言)

人知れぬ袖ぞ露けきあふことのかれのみまさる山のした草

(周防内侍)

かへし

奥山のしたかげ草はかれやする軒ばにのみはおのれなりつつ

(宰相中将)

この時、藤原公実は五十歳ぐらい、勅撰集に五十八首入っており、周防内侍は勅撰集に三十首、生没年は不明であるが、勅撰集に入った最も新しい歌は、寛治九年（即ち嘉保元年、一〇九四年）の作で、艶書合は九年後のことになるから、歌人としてすでに一家を為した後であろうし、五十歳は越えていたと思われる。筑前も勅撰集歌人、この時は七十歳か七十歳に近かった。藤原俊忠は俊成の父、勅撰集歌人。これは特に若く、二十九歳。一宮紀伊は長暦二年生、六十五歳。

三

この歌合は、堀河天皇の思いつきであるが、むしろ、歌の道に心

得ある人々によって演出された平安朝時代の恋愛風景の型が図らずも残されたことに興味がつけられる。平安人は、男女共に恋愛生活を享樂し、本能と感覚に溺れた日常を、和歌に託して美化し、可憐化すると同時に、一面、理知と機智を以て恋愛を日常茶飯事化し、遊戯化してもいた。その遊戯化することの興味が、四十首の贈答歌を以て艶書合を成功させたのであって、堀河天皇の思いつきは、その機微を捉えた機智によるものであったが、平安末期を象徴する歴史の意義を残すという、思い設けぬ副産物を加えたことは、泉下の微笑となつてゐるであらう。

少し詳しく跡を辿つてみると、堀河院艶書合は、実生活においての眞実な恋愛生活をそのまま、和歌生活に結びつけた、現実感豊かなものではなく、本来遊戯としていた恋愛生活の架空の型を、現在の文芸主義の世界に和歌によって実演し、掛け歌、返し歌の形式によつて描き出そうとしたものであつて、そこに恋愛実感はなく、理知と機智によつての、これを機縁としての心理的実験による美的生活の觀念上の再演といつていいものであつた。したがつて、実感もなく、興奮もなく、当時の貴族仲間て類似のことがしばしば行われていた勝敗本位の何合、何々合の中の一つであらうが、特にこの艶書合に認められる意義は、第一に、勅命によつて行われた艶書合としては前後に例のないこと、そのため、恋愛を遊戯として詠ずるにしても、かりそめの遊び心ではなく、眞剣な遊戯としての名歌を残そうとしてゐること、第二に、作歌由来や状況描写の前書はほとんどなく、歌が『源氏物語』や『和泉式部日記』にある例のように、一首を一艶書とする歌書簡となつてゐること、第三に、判者を置いてゐない

堀河院艶書合が象徴するもの

のは、普通の歌合とは違つて、歌の優劣によつて勝敗を決する形式を採らず、左右に分かれた男女が互に消息を取交わすを目的としたがためであること、第四に、その取交わしも、男女間の直渡しではなく、かたうと方人ねんじん（念人）か、講師またはこやし読人などが取次をしたであらうこと、すなわち、発信者と受信者と配達者の三者があつて、完全な書簡行為となつてゐること、第五に、社交遊戯として艶書合類似のものもあつたであらうが、歌屑として棄てられたか、残るものがない、堀河院艶書合のみが「今鏡」の称へと「群書類從」の収載によつて、後世に残つたのは、この歌合が、特に時人、後人の注目を惹くものであつたこと、などが数えられよう。これらは、すべて歌合の最も盛んであつた平安朝時代の文芸的性情を見せてはいるが、参加歌人の多数が高齢者であつて、艶書合の雰囲気や作品の刺激によつて、新しい恋愛体験へよろめく危険もなく、年齢的斜陽族が回顧する美的生活の美意識には、むしろ一味の冷気を感じさせるところに、末期的症状が認められると共に、型としてそれを樂しむ態度に、一つの時代から一つの時代へ移行する過渡的意識ないし現象のあることを見逃せないのである。

四

ここにいう二つの時代は、いうまでもなく平安朝時代と鎌倉時代とであり、過渡的現象といへば、院政時代に属するのである。本稿の時代区分では、平安朝時代を女性文化の時代、院政鎌倉時代を男性文化の時代と考へてゐるので、過渡的現象とは、平安の女性文化か

ら鎌倉的男性文化へ移行する中間の院政時代であつて、政治的にも、文化的にも、旧を送り、新を迎える交替の現象をいうことにならぬ。すなわち、政治的には、衰退する貴族勢力と興起する武士勢力との交替、文化的には、その内質を簡単に名づけていへば、文芸趣味から実用主義への交替である。堀河艶書合は、その交替の中にあつての出来事で、文芸的な遊びであると同時に、書簡遊戯として、あるいは、特殊な歌書簡として、根は平安朝にあるが、花は、院政時代に蕾み、鎌倉時代に咲き匂つたようなものである。

凡そ文芸趣味ないし主義が持つ美しさの要素は、高雅、典麗、優美、純全、風流など、宣長の物のあはれの、咲き定まる牡丹花のような感覚を持つていた。それが、貴族勢力の衰退から没落へと傾くにつれて、物のあはれに孤独な無常観を加えて行つたのである。院政の開始は政治上の一大変革であつたが、政權を仙洞に持つて行かれたあとの禁裏の空虚感、掩いがたいものがあつたであろう。堀河艶書合は、天皇の命令で行われたが、また、自然な成行でもあつた。艶書合につづいて堀河百首もある。大小の歌合や、何合、何々合と行われたのも、この空虚感、寂寥感を紛らす手段としたのであろう。しかし、また、平忠盛が昇殿を許されるや、西行は出家し、忠度は戦死し、建礼門院が剃髮して寂光院に籠ると、後白河法皇の、関東に遠慮されながらの大原御幸もある。咲き極まった白牡丹の花の、三つ四つが音もなく散り布くさびしさである。物のあはれは、むしろ院政期に入つてから源頼朝孝兵後の数年に集中されたかの観があるのではないか。それはまた、百年後の『方丈記』、『平家物語』などへ一脈を傳へていゝのではないか。そういう時代の移

り変りにつれて平安的ロマンティズムは、院政時代からいへば、すでにクラシズムとなり、反動としての地道なりアリズムが求められて来たのが実用主義、いかえれば、何事も事実を以て証拠とする実証主義への道であつた。「水鏡」、「大鏡」、「今鏡」などの鏡物、「明月記」、「吾妻鏡」などの記録物、「貴嶺問答」、「明衡往来」、「東山往来」、「釈氏往来」などの往来体が次々に迎えられ、「弘安礼節」式の書札礼の書が続出したのも、実證を重んじた風潮に乗つたからである。それはまた、いろんな面での型の形成に応ずるものでもあつた。

五

この堀河院艶書合を、わが国の書簡体小説の源流であるとする説が、暉峻康隆の「日本の書翰体小説」昭和十八年八月刊にある。前に、「万葉集」にある大伴旅人から藤原房前へ贈つた日本琴に添えた書簡を書簡体小説であるとした窪田空穂の説があつたが、これは、和歌を含む尺牘文であり、暉峻説は、書簡体小説の始源が恋愛歌の贈答にあるところに史性の必然性があるという見解である。氏は、まず、世界最古の書簡体小説が日本にあるとして、十八世紀の中頃に成立したイギリスのサムエル・リチャードソンの「パミラ」が、世界における書簡体小説の嚆矢であるという従来説を否定し、それに先行すること五世紀の平安朝末期に「堤中納言物語」中の「よしなしごと」があり、つづいて、鎌倉時代初期と推定される「上野君消息」があり、「パミラ」に半世紀を先立つ元祿九年九六六には井原西鶴の

遺稿「萬の文反古」があることを挙げて、

散文藝術としての書翰体小説は……「よしなしごと」と「上野君消息」を起点として展開しさうなものであるのに、歴史は見事に豫想を裏切つて、詩歌の世界を起点としてゐるのである。

といつて、堀河院艶書合をわが国における書簡体小説の始源であるとし、その理由を、当時の「文化の担当者たる貴族社会の男女関係は、恋歌すなはち艶書をもつてのみ結ばれてゐる」ことに帰して必ずしも予想外のことでないと思はれたのである。

もつとも、暉峻は、艶書といつても恋歌を合わせたものだから、それをいきなり書簡体小説とはいえないが、当時すでに動きはじめていた物語的志向を示していることによつて、始源と認めたのである。もつとも、「歌書簡」といえば、問題はな。また、氏は、この艶書合は、「源氏物語」その他の抒情的な恋愛物語に密接につながっているが、「落窪物語」の内容が伝奇的なテーマ小説であるために、叙事的な消息をふんだんに使っていることにも注意して、次のようにいつている。

わが国においても、書翰体小説が発達するについては、独自のしかも好適な基礎的條件があった。それは平安朝末期に発生して、間もなく国民教育の基本的テキストとなつた「往来物」の伝統である。「往来物」とは、「書簡往復ノ事」と説かれてゐる

堀河院艶書合が象徴するもの

るやうに、要するに書翰文範のことにほかならない。

これは極めて重大な発言である。その證として、「よしなしごと」が、藤原明衡の「新猿楽記」、「明衡往来」と、往来体ないし往来物としての形式が似ていること、「よしなしごと」は、小説として書かれたもので、書簡文範ではないが、借用を申し入れた夥しい諸国の物産の品目は、「新猿楽記」から採用したものが多しことなどを挙げて、「わが国最初の書翰体小説は、これもまた発生して間もない書翰文範（往来物）と密接な関係のもとに成立した」と結論した。

なお、艶書合からの正系として、艶書小説恋愛ともいふべき作品について、氏は、「はにふの物語」、「あだ物語」、「玉虫の草紙」、「ふくろふの草子」、「薄雪物語」、「詞花懸露集」、「薄紅葉」、「錦木物語」、「恨の介」等々、近世にまで列なる諸書を挙げたが、私見によれば、それらは、興味本位の物語を主としたものと、艶書の文範のためかと思われるものと二種に分かれ、往来物は次第に独立して、純実用本位のものとなつて行つたので、例えば、「懸露集」寛文元年（一六六一）の刊本による。は、初に、艶書の書き方を、「源氏」や「狭衣物語」の例を引いて詳しく説き、いろいろの場合の恋文の手本を十一篇掲げ、古歌を添えているが、歌のないのは、終に「歌あらばおくに書くべし。」と書き添えており、「薄紅葉」享保七年（一七二六）刊。では、古歌を利用して、特定の男女の恋物語が仕組んであり、「錦木物語」年代不明五巻は、「寄幼女二初恋」、「行空帰恋」、「被嫌恋」、「忍久恋二通」などに分類して、これはかなりの名文

で、歌も交え、おもしろく読ましているのであるが、こういう消息の見本を集めることが流行したのは、堀河院艶書合と、往来物の出現と、遊惰の風潮などの影響であろうが、また、何となく型を求める気風に動かされての実用主義の現象とも見られるのであって、院政時代から遠く明治時代の半ばに及ぶメイン・カレントであったのである。とすれば、堀河院艶書合の意義は、必ずしも「平安末期の家徴」のみとはいえないのである。

六

尾崎雅嘉の「百人一首一夕話」天保四年(一八三三年)刊を見ると、俊忠と紀伊との贈答歌について、「金葉集窓下に、堀川院のけさうぶみあはせによめる、中納言俊忠……其かへしに、此紀伊の歌あり。……又女房たちより其かへりごとをせさせ給へり。これを艶書合といへり。けさうとは懸想とかきて、人にこころをかくる事なり。それ故艶書をけさう文といへり。」とある。歌書簡ではあるが、「艶書」とも「けさうぶみ」ともいい、「懸想文」とも書くことも推定される。あとに懸想文壳の挿図を入れ、説明に、寛文のころ江戸時代初期には廃れた、とある。

折口信夫歌題型は、「懸想文のある観察」藤村博士功績記念会編「近世文学の研究」所載の中に、「懸想文は、早くから恋歌と並行して居た。私の謂ふ恋歌は長歌形式を採るもので、和歌なのは、艶書といひたい。」艶書は「艶書歌」の義である、という一節がある。

五老井許六の選した「風俗文選」宝永元年(一七〇四)の書類に「院、艶書」

と題して、

やまとの国にふくらふ鳥あり、鶯姫をこひて、文かきやる。
ことにそもじはまこともじ、いくたびも文かよはして、まことの文字の返し見るまで。

と書いたのがある。堀河院艶書合とは関係のないもので、藤井紫影の「註風俗文選通釈」にも、「何れの院の書し玉ひしにや、いまだ考へず。」とある。鳥は夜鳴く鳥なので、妻恋う男に喩えられたか、鶯姫に嘘の音使(音通)があるので、偽りの恋の情を恨むとしたものか、名こそうそ姫でも、まことの恋の情があれば、殊にそなたはそうらしいから、いつかは真心こめた恋の返事が来るであろう、という意味であろう。藤井博士は、「そもじといふよりまこともじといひ、まことの文字の返事といふ、俳言なるによりて爰に出したる」と見ゆ。」と註した。

以上の経過によつて知られる過渡的現象は、書札礼と相通するものがある。堀河院艶書合は、書簡の一形式としての歌書簡であり、文芸趣味のものであるが、「よしなしごと」は小説として書かれた書簡で、小説の一体と見れば書翰体小説の方が正しい。文芸作品であるが、内容は物品列挙の実用主義を含み、往来体は書簡文範としての純実用主義のものとなっている。二つの時代にかけての意義がここにあつておもしろく、書札礼としても、現存の資料がないので、中間的現象は定かでないが、文芸作品である「枕草子」に潜在書札礼があり、実用本位の「消息耳底秘抄」が事実を以て証明する実証主義に終始しているところに、時代の変遷が見られものである。